



昔話とその時代・序（下）

— 山姥話と現代 —

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

ここ一年近く焦点的に学び、考える民話活動の一つとして、山姥話と向き合ってきた。活動としてそこだけに集中するわけにはもちろんいかない。ことは今始まったばかりだと思っっている。ただ山岳信仰や自然への畏怖・暮らしのなかの貧困や飢餓、現世と異界やその境界の問題など、象徴文芸としての山姥話の背景の大きさ深さを改めて感じている。

山姥には大きく二つの貌（かお）がある。人喰いの怖さと懐深い恵みの懐かしさである。前者の山姥には飢餓感が絶えずまわりついていて、ほとんど喰うことの一点に収斂して物語は語られる。それは山姥の怖ろしさと同時に、それ以上に飢餓と

いう現象そのものもつ執拗さと狂気の気配に迫り着いたとき、ふと鳥肌の立つ思いもする。それは多分飢餓がストレートに今の私たちが暮らしているこの世界の課題につながっているからなのだ。現代の飢餓はほぼ貧困に直結する。しかも貧困当事者のすぐ近くを差し当り安定した暮らしを楽しむ人々を取り囲んでいる。その比較がはっきり視覚化されている中で、飢餓の荒廃は人々をより深い絶望や狂気に追い込む。そしてその絶望や荒廃がいつ狂気にスイッチオンされるか分らない。その狂気が自分に向けられたとき自己抹殺があり、他者に向けられれば暴力か思いもよらない奇行かが現象として起きるのだろう。

第 25 便
2023.2.1

塩田平民話研究所

〔事務局〕

長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2

☎0268-49-1231

✉shiodadaira.minwaken@outlook.jp

http://www.shiodadaira.minwaken.net



山姥の恐怖に追い詰められた登場人物は、切羽詰った場面ぎりぎりの必死の判断でその場を切り抜けるか、援助者の老練な知恵と配慮によって救われる。そしてすべてが「めでたし、めでたし」で終わる。山姥に登場する人間が食われたという話を私は知らない。数あるこの型の山姥話は多分この形一つに統一されて、意外と単純である。

山姥話ばかりでなく神話や民話における援助者と援助方法の問題は、丁寧に考察しないとけない重い課題の一つだと私たちは考えている。短絡するのは危険だが、現代の貧困と飢餓に対する山姥話の援助者のような役割をどうしたら果たせるのか。この話が指し示す一つの問題提起であろう。

山姥話の後の貌については、また別の機会に考えてみたい。



「焼棚山 山姥哀愁」
稲垣勇一画



12 月のある朝、民話研の仲間だった佐藤悦子さんの訃報を聞いた。鬱々とした気持ちで職場に向かい、帰宅してから、4 年前の秋に悦子さん含め女性 4 人で行った遠野探訪の写真はずっと見ていた。▼いっしょに行った仲間の一人が撮ってくれたさりげない旅の一コマ一コマ。溼潤とした悦子さんの笑顔とともに、薄靄に包まれた遠野の朝、現地案内をしてくれた堀切さんの語る「サムトの



婆」を聞いたこと、デランダラ野を歩いた時の足の元を寒さを昨日の事のように思い出していた▼旅のしおりからレンタカー、宿舎の手配、観光協会の方への手土産等、全てを完璧にこなし、「こういうこと好きなの」と笑った悦子さん。決して偉ぶったり恩着せがましくしたりすることのない人だった▼悦子先生に引率された修学旅行生のように、楽しい二日間だった。帰りの新幹線の中、また遠野に行こう！とはしゃぐ私たちを静かに微笑みながら見ていた悦子さん。悦子さんが遠野に向けていた思いとは何か。常に頭におきながら、今後も学習していきたい。そして、また遠野を旅したい。（和枝）

「民話語りっこ学びっこ」開催

「民話のひろば」を中断して三年。昨年10月29日、コロナ第7波と8波の間隙を縫って、念願だった「民話語りっこ学びっこ」を開催しました。これまでと同様に塩田公民館を会場に、今回は半日に絞って

の開催でしたが、70名近い参加者を得、成功裏に終えることができました。中味は、学習講演会、民話発表会、交流会の三本仕立て。講演は塩田平民話研究所 稲垣勇一 所長が務め、大盛況。民話発表会は語りのみとし、塩田平民話研究所のメンバーほか、群馬県の六合の文化を守る会も友情出演。民話塾スマイルキッズたんぽぽの受講生も参加し、好評でした。

民話発表会

今回は、口承文芸である昔話の本来の形、「語り」に絞った発表形式にした。語りは3団体が8話発表した。六合の文化を守る会には友情出演をお願いし、お二人に発表いただいた。六合は、長野県と群馬県の県境の山中にあり、まだ木地師がいるそう。素朴

学習講演会 「山人・暮らし・山姥伝説」

講師 稲垣勇一 所長

昔ばなしによく出てくる山姥。あるときは人を喰う怖い存在として、またあるときは人に福をもたらす山の神として。

山姥とは何か、ほぼ一年かけて民話学習会で学んできたことのまとめとなる講演。山姥が初めて文献に登場するのは、室町時代の謡曲「山姥」(世阿弥

作)。「百万山姥」の異名をもつ白拍子が、善光寺詣での旅の途中で本物の山姥に会う。山姥の語いの中で、「生まれも知らず、輪廻妄想を背負って山を巡り歩く」という山姥の真の姿が語られる。

江戸時代には、喜多川歌麿の浮世絵「山姥金太郎盃」や長澤蘆雪の「山姥育児図」に山姥の姿が描かれる。いずれの絵も金太郎の母としての山姥が描かれているが、蘆雪の絵からは大きな傘を持つ風貌から山人の暮らしとのつながりが色濃く見えるという。赤坂憲雄著「漂泊の精神史」の中に

「」の図に、山人と里人の関係性を見ることが出来る。境界となる神



社は、両者の交易の場となっていた。山人の異形や、鉄器作りなどの優れた力に対する畏怖。里人から見た山人の象徴が「山姥」に繋がったのではないかと、話を興味深く聞いた。山姥の民話は、全て里人の視点で語られている。山人の視点から描かれた民話はないのか。今後の課題として学びを続けていきたい。(弘子)

な語りと相まって、昔話の世界に引き込まれるような懐かしさを覚えた。



民話塾スマイルキッズたんぽぽの小学4年生の語りは、楽しく、テンポもよく、皆が「うんうん」と頷



きつつ聴いた。塩田平民話研究所からは5話。全体として各々が個性的で自分の語りになっていた。話の時代背景と思想、民衆の暮らしに目を向けて語ることも大切さを学んできた成果でもある。話の構成をつかみ、山場をどう伝えるかについても、話そのものの見事に助けられた。現代の聴き手に、現代の私たちが語る現代の素朴さを探したい等、次への課題も見えてきた。何よりも、参加者の熱心さに後押しされた。「ほっこりした時を過ごした」といった感想も寄せられ、新企画としての良い一歩が踏み出せた。ご協力いただいた多くの皆様に感謝する。(美和子)

語りの感想 伝わるうれしさを

民話塾スマイルキッズたんぽぽ 土屋 叶実 (小4)

私は、「民話 語りっこ学びっこ」で語って、思ったことがありません。うれしかったことは、私の語りでお客さんが笑ってくれたことです。三年生の時、初めて人の前で発表をした時には、あまりお客さんの表情が変わりませんでした。一年生のときから稲垣先生に指導してもらい、少し感情の出し方や間の取り方が上手になったからかもしれません。

そして、すごいなあと思ったことは、塩田平民話研究所のみなさんの語りが改めてとてもうまいというところです。なぜかというとお客さんがうなずいていたり、ときどき表情を変えていたりしたからです。私も語りを聞いて、お客さんと同じようにお話しにひき込まれました。とてもきんちようしてははずかしかつたけれど、楽しくできたので、機会があればまた多くの人に私の語りを聞いてほしいです。



交流会

夕闇迫る時間の開催だったため、遠方からの参加者は家路が急がれ交流会参加者は少なめでしたが、講演の感想・疑問点、民話の主題に応じた語りの姿など、左記のような内容が気兼ねなく話され、実りある時間でした。

怖い山姥話は里人側からの視点で描かれているので、山姥に想いを寄せて語ることに無理がある。山姥に想いを寄せて語るのであれば、やさしい山姥の話を選ぶこと。
山姥が酒や餅が好きなのは、神への供物であることとつながっている。

六合の文化を守る会

語り活動で目指したい事

六合の文化を守る会 事務局 山本 茂

ふり返ると、民話と関わって五十数年になる。当時は高度経済成長の真っただ中、文明の利器で便利な世の中に突き進んでいた。しかし、反面、人のあたたかな心、絆などが疎外される心が心配された。

このような時代背景の中で民

話との出会いがあり、日本民話の会、塩田平のみなさんとのつながりなどを通して、民話の大切さを強くした。長い冬の閉ざされた生活の中、いろりを囲んで語られた「むかし」(入山ではこう呼ぶ)は、子どもの心に素直に受け入れられたと思う。民話の心として大切な勤勉、正

直、優しさ、知恵などが、最も身近なおじい・おばあから語られることは、子どもにとって唯一の楽しみだった。そこで、今こそ、このような語りの方が、家族、地域等で行われることを強く願っている。今は、学校、寺、各団体等で語り活動をしている。



六合の子ども達の語りの様子

産川

12月の中頃、夫がコロナに罹った。職場で流布して来たので注意して来たのだが、それでも感染してしま

った。2日ほど熱が出たがワクチン4回接種のおかげか、熱が下がって以降は何事もなく、ひたすら陰性になるのを待つ日々▼本人は可哀そうではあるが、同居する私にとっては「まったく、もう!」という感じ。仕事に忙しい時期で「絶対休めない。休みたくない!」徹底的に家庭内隔離をして夫を寝室に閉じ込めた。私はリビングを根城とし、朝晩、食事やお茶をお盆で運び、お昼用にお弁当を作って入口に置き、抗原検査で陰性を確認してから出勤した。幸い、私は感染せず夫も回復し通常の生活に戻った▼どうも我が家の闘病日誌は喜劇的な要素が含まれてしまうが、家族構成や感染した時期、職業などによっては、どれほど大変なことだろうか。それは過去のことでではなく現在進行形のはずだ。人間は良くも悪くも慣れてしまふ。ポジティブに生活したいが、悪く慣れてはいけない▼私は知りたい。知って恐れ、知って対峙したい。ただそれだけなのだが、なかなか教えてくれない情勢である。(恵美子)

ふるさとの 民話探訪 21 白山信仰

山家神社（真田町山家・白山比咩神社（上田市山口）の二社は、祭神に菊理媛神を祀る白山信仰の流れを汲む。この二社にまつわる民話がある。加賀国から真田の地に、白山神と妻白山姫、お供の弥伍が訪れる。真田町石舟の「白山

姫」民話では、腐れ病を患った白山姫が夫の白山神に追われ、石工に造作中の石舟の下にかくまってもらい難を逃れる。一方、山家神社の「白山様」は、病を患った白山姫を嫌い、娘を伴って白山神が逃げ出し、白山姫が追う展開。白山神は娘と夏冬交互に山家神社と四阿山を行き交う。明治初年まで行われていた神送り・神迎えの神事と合致する。白山神は、白山姫との縁を切る際、持っていた梅の花形をあしらった契りの盃を川に投げ捨てる。

民話とわたし II | 語りの魅力に惹かれて |

塩田平民話研究所友の会員 小林 寛恵

読み聞かせ活動を通じて民話の魅力強く感じています。お話会で子ども達に語って聞いてもらうのにはどんな作品がふさわしいのか考えながら昔話を聞いたり語ったりして参りました。その中で子どもは特にこの地域の民話に親しみを感じて熱心に聞いていますと体感することが何回もありました。それと同時に民話という文化を語り継いでいくには自分が民話について無知であることも痛感致しました。一方、私が民話に引き付けられる理由は、その時その場限りの生きた語りの場の魅力と、シンプルなストーリーに隠された先人のメッセージを感じさせることです。それらを子ども達に生の語りで伝承する活動に喜びを感じます。一回でも多く語りをお届けしたい、そのために民話と語りについて、学んでいきたいと思えます。友の会会員として学びを深め、先輩方と共に民話を届けるひと時を心待ちにしています。

事務局だより

塩田平民話研究所のホームページを昨年10月に開設しました。「お知らせ」「年間スケジュール」「活動の様子」「くらふち通信」「そのまんなま語れる上田の民話30」などが閲覧できます。URL・QRコードからアクセスしてみてください。



<http://www.shiodadaira-minwaken.net>



山家神社



白山比咩神社

編集後記

「木霊」にも記されたとおり、塩田平民話研究所の事務局次長を務められていた大切な仲間、佐藤悦子さんが12月18日、逝去された。享年74歳。ここ二年闘病されていたが、また元気に復帰されるものと思ひ込んでいた。2020年8月発行の「くらふち通信」第20便「産川」が遺稿となった。心から冥福を祈りたい▼コロナ感染は大きな波を繰り返し、未だ収束の見通しが立たない。致死率が下がってきたとはいえ、感染者数も死者数も過去最高を更新している。にも拘らず、感染症法上の扱いを2類相当から5類に引き下げることが検討されている。蔓延による集団免疫獲得が究極の目標なのだろうか。有効な手が打てないまま、コロナとの闘いに敗れたかに見える▼後の時代に、「あのときが歴史の転換点だった」といわれる「とき」に、今、立会っている。専守防衛を踏み外す敵基地攻撃能力の保有、大増税を見据えた莫大な防衛予算。刃を向ければ刃が返ってくる。外交努力こそが平和への道筋であることを肝に銘じるべきだ▼福島の悲劇を忘れた原発回帰は、「原発神話」に再びすがることになる。甘い汁は誰が吸うのか。(弘)